

---

# ロボットのユメ

凶華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロボットのユメ

### 【Nコード】

N9493E

### 【作者名】

凶華

### 【あらすじ】

人間がユメを見るようにロボットもユメを見る・・・

人は、ユメというものを見る。

・・・そして、ロボットも・・・

「機能停止」

その一言で、私達ロボットは動かなくなる。次に、

「機能再生」

といわれるまで。

その間、ロボットは人間と同じようにユメを見る。

そして、そのユメは人それぞれ違うユメを見るように、ロボットもそれぞれ違う。

しかし、そのユメを覚えることはできない・・・

私の今日のユメ

「ねえ、そのロボットちよつと来て！！この荷物重いから持つてよ。」

『かしこまりました、奥様。』

そういつて、私は奥様の荷物を持つと、奥様の後に続いて家の中に入った。

そして、言われた場所にカバンを下ろすと、この家の子供達が私の周りに集まってきた。そして口々に、何か言い始めた。しかし、私には奥様以外の言葉は理解できないようプログラムされている。

だから、子供達が何を言っているのか私には理解できず、その場にボーっと立っていた。しばらくすると、子供達が飽きて他のところへ行ってしまった。本当は追いかけて行きたかったが、私は追いかけてもせず、荷物を置いた場所から動かないでいた。いや、動けなかった。そうプログラムされていたから・・・

カチリ

ロボットが起動し始めた。

何故なら、家の敷地内に何か入ってきたから。

家に入ってきたのは、この家の奥様が乗っている車だった。

その車は、駐車場に止まると勢いよく子供達が出てきた。

後から出てきた奥様は、車に詰まれている大量の荷物をチラリと見ると、大きな声で

「機能再生」

と言い、一呼吸あけたあと、

「ねえ、そのロボットちょっと来て！！この荷物重いから持っ  
てよ。」

と言った・・・

（後書き）

意味が分からなかったら、ご勘弁を（笑）

私も、書いているうちな分からなくなっていっちゃったんで（汗）

読んでいただいた方、ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9493e/>

---

ロボットのユメ

2010年11月23日05時48分発行